藤井家に残された絵葉書

土生 和彦

はじめに

枚と封書三通の計一六点については、達吉の滞米時期を明らかにする重要な証拠となるものであったため、既に前号 みならず、同時代資料として興味深いものも含まれていることから、ここで紹介することとしたい。 の当館研究紀要において紹介している。今回、その他の絵葉書について調査を進めたところ、藤井達吉関係の事柄の 者によれば母・當子から譲られたものであるという。その中でもアメリカ滞在中の達吉から家族に宛てた絵葉書一三 葉書資料は実際に差し出された絵葉書や封書と、未使用の絵葉書が入り混じった状態で一箱に保管されており、寄贈 譲り受けたが、その中に一三四点に及ぶ絵葉書等(以下、藤井家絵葉書資料とする)が含まれていた。この藤井家絵 に伝えられた藤井達吉に関わる作品群が当館に寄贈された。その際にこれらに関連するものとして様々な周辺資料も 平成二六(二〇一四)年度、藤井達吉の姪(次兄・重二郎の娘)・當子の娘にあたるお二人から、それぞれの手許

ちが絵葉書の原画を多く手がけたことなどいくつかの要因があげられる。さらにこの流行を受けての印刷技術の革新 郵便に絵葉書が多く使用されたことや、 が印刷業者によって発行され流通していくこととなった。当初は紙質にしても印刷技術やデザイン、図案の面にして 省令によって新たに「私製葉書」の使用が認められる。これをきっかけとして、絵や写真を刷り込んだ様々な「絵葉書」 取り扱いも開始される。その後しばらくの間、葉書は官製のものに限られていたが、明治三三(一九〇〇)年の逓信 や版元間の競争が相乗効果を生み出し、 も飛躍的に増大したことでいわゆる「絵葉書ブーム」が起こるのである。その理由としては、戦地と国内を結ぶ軍事 も粗悪なものが目立つ状態であったが、明治三七年に日露戦争が勃発すると一気に質が向上していく。加えて発行数 日本で初めて切手が発行され郵便制度が始まったのは明治四(一八七一)年のことであり、二年後には官製葉書の 絵葉書の使用そして収集というかたちで絵葉書の普及が進んでいった。 戦意高揚のための記念絵葉書が幾度も発行されたことに加え、著名な画家た

用の絵葉書類が七九枚となっている。詳細は順次後述するが、これらの絵葉書が発行され、あるいは使用されたのは、 部大正期のものが含まれているものの、明治三七年から四一年頃のことである。まさに「絵葉書ブーム」の時期と 致しており、 藤井家絵葉書資料においては、既に紹介した一六点を除いた一一八枚のうち、使用済絵葉書が三九枚、 本資料の絵葉書は大半がこのブームと関わって発行、使用されたものであった。以下、 使用済のもの

藤井家に残された絵葉書

と未使用のものとに分けて紹介していく。

使用済の絵葉書【三九枚】

からその投函日を確認もしくは推定することができるものが多い。そこで、 葉書についての情報も記すことにする。 は到着日) まずは使用済の絵葉書三九枚を見ていく。 の順に紹介する。 なお今回は絵葉書資料の紹介という点から、本文の内容とあわせて、使用されている絵 使用済の絵葉書には差出人と受取人の存在があり、本文や消印の日付等 以下その推定された投函日 (不明の場合



【使用絵葉書】画家は和田三造と推定(兵士の行進と群集

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 両人

【葉書裏】八月十六日朝 我旅順/攻囲軍司令官ハ軍参/謀山岡少佐ヲ軍使トシテ敵/軍前哨ニ差遣シ/聖旨並ニ勧降 書ヲ敵ノ/要塞参謀長ニ手渡セシメタリ/八月十七日午前十時 敵ノ軍/使回答ノ要旨左ノ如シ/戦闘員外 ノ避難救護ノ/聖旨ニ対シ 直ニ応スルヲ難ジ/降服ノ勧告ニハ絶対シ 之/ヲ拒絶セリ/明治三十七年八月



をはじめ残されている絵葉書からは、

戦況が大きく報道されるたびにその内容を書き送っていたことがわかる。

おける一年か

表

※最も消印の日付が早いものである。 も報道等を引用したものと考えられるからである。そのような葉書を親元に送った理由は定かではないが、本状 事等からの引用と思われる日露戦争関連の記述が重二郎の葉書の文言とも酷似していることから、 く入手できる立場にあったわけではないようだ。というのも同時代の能役者・梅若実の日記に記された、新聞記 済分の大半を占める重二郎から父親への葉書は、 本文の内容は日露戦争の戦況を詳細に伝えるもので、いわゆる私信は記されていない。藤井家絵葉書資料の使用 上京しておらず、 の次兄・重二郎であると思われる。「両人」が意味するところは現状では判然としないが、この時期達吉はまだ 差出人「東京 藤井両人」や後に「藤井重二郎」「藤井重」とあるものと筆跡等に違和感がないことから、達吉 長兄・安二郎の情報も詳らかでないため、 受取人は達吉の父・忠三郎。差出人は 一部を除いて同趣の内容である。ただし重二郎が戦況をいち早 重二郎夫妻を意味すると捉えるのが妥当であろう。 東京 両人」とあるが、③の葉書の 重二郎の葉書

なお本状及び②の葉書には「旅順攻囲戦(第一回総攻撃)」の情報が記されている。



2-2 裏

ナリ/三拾七年八月二十日

②明治三七年八月二〇日発 東京・両人から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】画家は和田三造と推定(騎馬兵隊)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 両人

【葉書裏】八月十九日 遼陽前面ノ/鞍山站沙河鎮ヲ占領シ/遼陽の露軍ハ奉天/退却セリ 奉天将軍ハ/奉天城各門 拾壱 クロンボイニハ/六個ノ損傷アリ 戦死者両艦/ニテ副長以下百四十名 負傷者/艦長以下参百参拾名 ニ白旗ヲ掲ケ中立/ヲ表 砲撃ヲ予防セリトノ着/電アリ/ロシヤ号煙筒汽罐各三個ヲ破壊/吃水路以下ニ

③明治三七年八月二二日発 東京・藤井両人から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】画家は和田三造と推定(海上の軍艦)

表

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 藤井両人

【葉書裏】八月十日 我聯/合艦隊ノ攻撃ニヨリ 東伏/見宮/殿下/ナリ/三十七/年/八月/廿一日/日曜日 ボイへ損傷ヲ與ヘ/リユーリックヲ撃沈セリ/八月廿日午後ヨリ廿一日午前ニ於 各/千歳、對島二艦敵艦 、ノーウ井ックヲ樺太島/沖(コルサコウ港)ニ於テ砲撃シ遂ニ/撃沈セシメタリ/因尓千歳/副長ハ/ 、於テ旅順艦隊全部/戦闘力ヲ失セリ/八月十四日 第二艦隊浦汐艦隊ヲ蔚山沖ニ戦闘シ/ロシヤ、 /旅順艦隊ハ遣走セリ/其艦ヲ失フ数隻■シト/戦闘力ヲ失シ 事実ニ クロン

※本状には日にちを少し遡った「黄海海戦」と「蔚山沖海戦」の様子を記している。詳細が一般に報道されたのが

この日だったのであろう。

3-2 裏

4-2 裏

(4)-1

④明治三七年九月二日発 東京両人から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】荻原一羊 《田舎者の万歳》(絵葉書万歳(一九〇四年)より)

【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様/東京 両人

【葉書裏】遼陽■■既ニ■命ヲ出ス。我前進軍ト/ノ距離僅ニ一里 敵ハ最早遼陽ニ足ヲ止メ/■戦ハズ/三十七年/

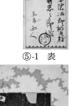
九月一日



*

「遼陽会戦」に関わるもの。使用された絵葉書は「万歳」をテーマにしたシリーズと思われ、藤井家絵葉書資料

には二枚確認できる。





⑤明治三七年九月六日着

東京両人から藤井忠三郎宛

(赤十字の看護兵)

両人

/の報尓接せ須 我/軍の死傷は多



【葉書裏】九月四日/満州軍総司令/官公報/太子河右岸の情況/は其后まだ精確, 【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京

/大なるべきも/未だ詳報尓接せ須 目下取/調中/三十七年九月四日

⑥明治三七年九月六日着

東京両人から藤井忠三郎宛

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 【使用絵葉書】現状詳細不明(紀元二六五四年のデザイン)

⑥-1 表

顾台



両人







【使用絵葉書】現状詳細不明(日章旗と行軍を描く)

⑦明治三七年九月六日着

東京両人から藤井忠三郎宛

6-2









【葉書裏】遼陽占領公報/満州軍総司令官の遼陽占領ニ関する報告左ノ如シ/明治三十七年九月四日午前九時発/仝











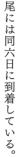


⑦-1 表











7-2 裏













「遼陽会戦」の結果に

棚









®-1 表



⑧明治三七年一○月一○日発 【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様/東京市日本橋区本材木町/藤井 【使用絵葉書】 H・I

· (野 営₁₀

東京藤井から藤井忠三郎宛

【葉書裏】旅順攻囲軍戦報/五月二十六日ヨリ/七月三十一日迄ニ於/ける攻囲軍作/戦経過公報/発表セられた里。

/明治三十七年/十月十日

8-2

※重二郎の差出人住所に「日本橋区本材木町」とあり、後に記される住所「日本橋区榑正町」とは異なっているの

明治三八年三月(四参照)までの間に転居したものと思われる。

⑨明治三七年一○月一三日発

で、この後、

9-1 表

惠

【葉書裏】兎に角今回/の決戦ハ開戦以来/未だ其比を見ざる/壮絶快絶の大戦尓』

/して 我軍は頗/る良好なる結果

(一九〇四年)より)

/を得つゝあり/三十七年十月十三日

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京

藤井

【使用絵葉書】木曜会(サイン:H・I)《騎兵の奮闘》(日露戦争陸戦之部第一輯

東京藤井から藤井忠三郎宛

9-2

10-1

表

⑩明治三七年一〇月一七日発

【使用絵葉書】荻原一羊《万歳の風景》(絵葉書万歳(一九〇四年)より)

東京藤井から藤井忠三郎宛

【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様/東京

【葉書裏】十月十日より本日尓渡る/奉天方面の大会戦/を沙河の会戦と/名つく/沙河會戦/大捷/万歳/十月













10-2







⑪明治三七年一〇月一七日発

東京藤井から藤井忠三郎宛



【葉書裏】三十七年十月十七日/中央軍/ハ沙河/堡南方/を占領し/戦利砲/総計/三拾四門/となる/左翼軍は

藤井

第一回発行)「九連城ノ戦利品」2

/ラフボフトレ■鉄道の/東方ニ現れ之を占領/せる哉 敵ハ鉄道を利/用して退却/する■いに観戦/外

国人皆我軍作戦ノ雄大なるを/賞す/戦利砲三十門/小銃■■/多数

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省

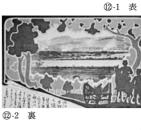
古りた一年の

裏

11)-2

資料紹介





⑫明治三七年一〇月一七日発 東京藤井から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省(第一回発行)「鴨緑江ノ砲戦)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 藤井

【葉書裏】沙河/會戦/大捷/我右翼/軍方面/へ現れたる/敵の約八/師団 遺棄/せし死体五千/五百あり 死傷/ ハ三万ニ達/せるならん/三十七年十月十七日

※⑩~⑫は同日の発送。 報を記す。 初めて逓信省発行の日露戦争記念絵葉書の使用が確認される。 「沙河会戦」についての情



13-2 裏

【葉書裏】沙河大激戦の大好結/果 【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 もの左の如し/捕虜

⑬明治三七年一○月二三日発 東京藤井から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第一回発行) 「南山ノ攻撃・南山ノ鉄条・占領後ノ南山

藤井

約五百人/遺棄せし死屍 十月廿二日午後着/沙河会戦ニ於ける戦利 壱万五百五十人/三十七年十月廿三日 /具他に関し 本日迄略し調/査せし 第一

⑭明治三七年一〇月二三日発 東京藤井から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第一回発行)「大同江流氷中ノ我艦船

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 藤井

古まる

(4)-1 表

14-2 裏

> 【葉書裏】三十七年/十月廿三日/第二/戦利品/大砲四十五/門/弾薬車 二十三 / 砲弾 六千九百弐十発/小銃弾薬 七万五千発/刀 弐十振/方匙 三拾七輌/小銃 四十八/圓匙 五千四百七十四 四十四

17-2 裏

藤井家に残された絵葉書

15明治三七年一〇月二三日発

東京藤井から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第一回発行)「第一軍司令部渡靉河・戦後ノ蛤蟆塘・第一軍

15-1 表



15-2 裏

【葉書裏】三十七年十月廿三日/第三/外套三五六/折畳テント

八十五/外 数十里ノ戦場ニ/遺棄セシ武器莫/大

〜数ニテ僅少ノ日数ニテノ/調査遂ケ難シ/敵ノ死傷総数/六万人

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京

靉河渡歩

長少け はかかんとい

ちゃんりはつ

表

(6)-1

⑯明治三七年一二月二五日発

東京藤井から藤井忠三郎宛

(逓信省 第二回発行) 藤井

「得利寺戦役我兵ノ砲撃」

※⑬~⑮も同日の発送。 「沙河会戦」の戦果報告であり、本文中に第一、第二、第三と内容の順番を明示している。

16-2 裏

⑰明治三七年一二月二五日発

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 【葉書裏】攻囲軍ノ大活動/太陽湖鴨湖嘴/砲臺ノ占領/卅七年/十二月廿五日 【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書

二五日発行)

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省

第二回発行)「我巡洋艦ノ陸上砲撃」(一九〇四年一二月

東京藤井から藤井忠三郎宛

ちゃんという

177-1 表

【葉書裏】旅順州/戦の一段/落 敵第/一艦隊の全/滅/明治三十七年/十二月廿五日 【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 藤井

※⑯・⑰は逓信省の第二回記念絵葉書が発行された当日に、 その絵葉書を使用したものである。



表

⑱明治三八 (一九〇五) 年一月一日発

東京重二郎から藤井忠三郎宛

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京/重二郎

候御厚/礼申上候 ま古と/尓よろしく出来

十二時

∠大井ニ喜比申候/程尓申上事■■■/多忙申し何れ春具尓万多申上候/拝具/三十一日

【使用絵葉書】日本金工協会第二回競技会記念絵葉書



おからかに身 表

19-1

は不明だが、羽織を受け取ったことへの礼状のようである。 戦争に関わるものではない。日付的には年質状とも考えられるが、そのような雰囲気はみられない。

※重二郎から忠三郎に宛てた絵葉書の中で、

唯一日露戦争と関係のない話題が述べられている。

使用絵葉書も日露

状況の詳細

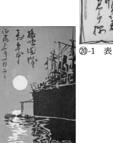
⑩明治三八年一月二日発 (東京発消印) 藤井忠三郎宛

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様 【使用絵葉書】画家は和田三造と推定(提灯]4

19-2

裏

【葉書裏】旅順陥落/萬歳/征露二年/一月二日



20-2 裏



【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様

【葉書裏】旅順開城/萬歳/征露二年一月二日



21)-1 表

②明治三八年一月二日発(東京発消印) 藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】画家は和田三造と推定(行軍)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様

【葉書裏】旅順降伏/萬歳/征露二年/正月二日





裏

22-2 ※⑲~⑳の四枚は、明治三八年一月二日の旅順陥落の報を受けて、速報的に記したものと思われる。

20明治三八年一月二日発 (東京発消印) 【使用絵葉書】現状詳細不明(東京吉川公文館製

【葉書裏】旅順陥落 【葉書表】三河国碧海郡

/棚尾村/藤井忠三郎様

藤井忠三郎宛

遼東半島地図

日付は読み取れず、

着地の消印も捺されていないが、本文中の記載から二日ないしは三日の投函と考えられる。

発地の消印の

②明治三八年三月一一日発

東京

重二郎から藤井忠三郎宛

だけなる行動

表 23-1

【使用絵葉書】二世 五姓田芳柳《先登旗》(『ハガキ文学』二巻二号付録)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾/村/藤井忠三郎様/東京 重二郎

【葉書裏】三月十日大本営着/電/今十日午前十時/奉天ヲ占領/セリ/数日来の包囲攻/撃は全て其目/的ヲ達セ IJ /萬歳/明治三十八年三月十日

23-2 裏

※奉天会戦の 「勝利」にあたって記したもの。

劉明治三八年三月一一日発(名古屋発消印) 達吉から藤井重二郎宛

【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書(逓信省

第三回発行・赤十字事業ノ部)「篤志看護婦人会ニ於ケル貴婦人戦傷者

ノ手術介補」

24-1 表

24-2 裏 【葉書表】東京日本橋区槫正町十四/藤井重二郎様/達吉

【葉書裏】大会戦/大捷萬歳

大捷多蔵 人后剩

②明治三八年三月一一日発 ナゴヤ藤井から藤井重二郎宛

【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第三回発行・赤十字事業ノ部)「篤志看護婦人会総裁閑院宮妃智恵子殿下」

【葉書表】東京日本橋区槫正町十四 /藤井重二郎様/ナゴヤ 藤井

【葉書裏】奉天占領/萬ざい







【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書

(逓信省

第三回発行・赤十字事業ノ部)「篤志看護婦人会ニ於ケル内外貴婦人ノ

ナゴヤ藤井から藤井重二郎宛

繃帯調整





26-2

【葉書表】東京日本橋区槫正町十四 /藤井重二郎様/ナゴヤ 藤井

【葉書裏】旅順占領萬歳 ※奉天会戦の「勝利」にあたっては当時名古屋に居た達吉からも重二郎にあてて一度に三枚の葉書を送っている°®・ ◎にはナゴヤ藤井とあるだけだが、∞と同筆と見られ、 これも達吉によるものだろう。逓信省の第三回記念絵葉

利を祝う文言のみの簡略な内容となっている。

書の赤十字事業ノ部三枚組をそのまま使用している。情報の詳細を記すことが多い重二郎のものとは異なり、勝

27)-1 **27**-2 裏 **愛明治三八年三月一六日発(東京発消印)**

【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書逓信省

(逓信省

第三回発行・遼陽ノ部)

「遼陽ニ於ケル敵ノ糧秣焼棄・東京ニ於

藤井重から藤井忠三郎宛

ケル遼陽陥落祝捷ノ状況

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/藤井重

【葉書裏】鉄嶺占領萬歳!/我先進部隊ハ今十六日午前/零時二十分鉄嶺ヲ占領/せり 三月十六日

「鉄嶺占領」を受けて書かれたもの。

*



【葉書裏】 敵艦/全滅/!/萬歲/卅八年/五月廿九日

28明治三八年五月二九日発 【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書 東京重二郎から藤井忠三郎宛 (逓信省 第三回発行・天長節ノ部)「戦地ニ於ケル海軍ノ天長節・東郷大将

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京 重二郎

古事る子段



❷明治三八年五月三○日発

東京

重から藤井忠三郎宛



中山大井

30-1







29-2 裏

⑩明治三八年五月三〇日発 東京藤井から藤井忠三郎宛 【葉書裏】いつしか雲/はれて/玄海灘目指し/明治卅八年/五月三十日/未明大海戦の/翌日

重

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京

【使用絵葉書】武内桂舟「北条時宗と神風」(『ハガキ文学』二巻一号(一九〇五年一月)

) 付 録₁₆

【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書(逓信省

第三回発行・海軍ノ部)

「水雷艇隊ノ敵艦攻撃

【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様/東京 藤井

【葉書裏】敵艦捕獲/戦闘艦 二隻/海防艦 二隻/特務艦 一隻/駆逐艦 一隻/明治三十八年/五月三十日

30-2 裏

【葉書表】三河国碧海郡/

【使用絵葉書】明治三七年戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第一回発行) /棚尾村/藤井忠三郎様/東京

東京藤井から藤井忠三郎宛

「旅順口ノ封鎖中ノ我艦隊・我艦隊ノ停泊

③明治三八年五月三〇日発

【葉書裏】捕虜/海軍少将以下/三千名/余/明治三十八年五月三十日

31)-1 表

愆明治三八年五月三○日発 東京

重から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 第三回発行・海軍ノ部)「連合艦隊ノ主力敵艦ニ向フ」

31-2 裏

【葉書表】三河国碧海郡/棚尾村/藤井忠三郎様/東京 重

【葉書裏】敵艦事実上ノ全滅!/明治三十八年五月三十日

32-1

助班中害三个

※30~30の一連の葉書は、 日本海軍がロシア・バルチック艦隊を破ったことで知られる「日本海海戦」の勝利を受

けてのもの

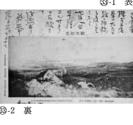
32-2

裏

資料紹介







❸明治三八年七月一○日発(東京発消印) 【葉書裏】七月十日/大本営着電/樺太上陸/軍ハ大なる/敵の抵抗/を凌ぐるで/もなく/七月八日/早朝/コル 【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/ [東京市日本橋區槫正町拾四番地/藤井重二郎](住所印 【使用絵葉書】戦役紀念郵便絵葉書(逓信省 サコフ/ヲ占領せ/り/陸海軍/萬歳/明治三十八年七月十日

第三回発行・旅順口ノ部)「海鼠山占領ノ高地ヨリ見タル旅順口ノ全景!

藤井重二郎から藤井忠三郎宛

33-2 *

るが、達吉から送られた赤十字事業之部の葉書については、 「樺太占領」を受けてのもの。なお本状を含めて重二郎は逓信省の第三回記念絵葉書の各部のものを使用してい

使用しなかったようである。

劉明治三八年一○月八日発(東京発消印) 藤井重二郎から藤井忠三郎宛

一時時後了中

表

34-1

【使用絵葉書】「宮城二重橋之景」

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/ [東京市日本橋區槫正町拾四番地/藤井重二郎] (住所印)

【葉書裏】一周年/紀念/明治三十八年十月八日

※ここでいう一周年も日露戦争に関わるものと思われるが、 準とした一周年かは不明である。あるいは個人的な出来事の可能性もある。なお、本状と⑬のもの二枚には差出 人である藤井重二郎の住所印が捺されている。 日露戦争の宣戦布告は前年二月のことであり、 何を基

34-2 裏



表

裏

③明治三八年一〇月二三日発(東京発消印)

藤井重二郎から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】観艦式紀念絵葉書 (逓信省発行)「東郷大将・日露戦役ニ於ケル帝国軍艦ノ増減」

【葉書表】三河国碧海郡 /棚尾村/藤井忠三郎様/東京日本橋区槫正町/藤井重二郎

【葉書裏】私信なし



36明治三八年一〇月二三日発(東京発消印) 【使用絵葉書】観艦式紀念絵葉書(逓信省発行)「皇居二重橋・水兵 藤井重二郎から藤井忠三郎宛

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/東京日本橋区槫正町/藤井重二郎

【葉書裏】私信なし

※勁・勁も同日の投函。便りは書かれていないが、前日に発行された観艦式紀念絵葉書を用いており、

消印も「明

治卅八年凱旋觀艦式紀念」のものであるため、まさに記念として発送したものであろう。

鄒明治三九(一九○六)年五月二○日発 名古屋 藤井から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】 現状詳細不明(花)

【葉書表】三河国/碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様/名古屋 藤井

【葉書裏】私信なし

37-1

※名古屋の藤井、つまり達吉から父·忠三郎へ送られたものと思われる。便りが記されておらず用件等は不明だが、 消印が「鐵道五千哩祝賀會紀念」のものであるため、 記念的に送ったものの可能性がある。ちなみに達吉はこの

⑧明治三九年五月二七日発 (東京発消印) 藤井忠三郎宛 37-2

裏

年一月にアメリカから帰国している。

【使用絵葉書】現状詳細不明(東郷大将)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様

【葉書裏】私信なし

* 明治三九年は、 ので、今は重二郎によるものと考えておく。 もある。宛名の字体からは何とも言いがたいが、達吉は一週間前に名古屋から父親宛の葉書を出している(劒) 「明治卅七八年戦役海軍記念日」の東京発消印が確認できるが差出人は書かれておらず、便りも記されていない。 一月にアメリカから帰国した達吉が、時期は不明ながら上京する年であるので達吉による可能性



資料紹介





③明治三九年八月七日 (湯本発消印) 達吉から藤井忠三郎宛

【使用絵葉書】現状詳細不明(箱根街道写真)

【葉書表】三河国碧海郡棚尾村/藤井忠三郎様

【葉書裏】其後/無事/御座候/一両日/中尓/東京へ/行申候/余は東京から/塔の澤/達吉

きがそのタイミングにあたるかは、 達吉はこの年に七宝店を辞めて上京し、 ※東京へ向かう途中の達吉が箱根の塔ノ沢から忠三郎へ送った葉書。順調に東京へ向かっている様子が記される。 今後の検討を要する。 美術工芸家としての道を歩みだすことが知られているが、この時の東京行

にあてられた葉書三六枚は、 は同じく名古屋から棚尾の父・忠三郎へ、一枚は東京へ向かう途上の箱根から忠三郎に宛てたものであった。忠三郎 思われ、三四枚ある。残る五枚はいずれも達吉が出したものと思われ、三枚は名古屋から東京の兄・重二郎へ、一枚 などからいずれも東京の藤井重二郎(達吉の次兄)が碧海郡棚尾村(現・碧南市)の父・藤井忠三郎へ宛てたものと 半を占めるのは、 にしていた重二郎の手許に残されたはずの三枚も藤井家絵葉書資料の中に含まれていることは興味深い。 以上使用済の絵葉書についてみてきたが、あらためて差出人と受取人について整理しておこう。三九枚のうちの大 差出人名こそ「藤井両人」「東京 棚尾の藤井家でまとめて保管されていたものであることは明らかだが、当時居住地を別 藤井」「藤井 重」「藤井重二郎」といくつかあるものの、

未使用の絵葉書

葉書などが含まれているので順次紹介していく。 録の絵葉書はまさにその好例といえる。このほか、 半数近くを占める、 して絵葉書を同封することが流行した。 続いて未使用のものをみていくことにする。藤井家絵葉書資料の未使用絵葉書の中で特筆すべきことは、三二枚と 雑誌『女学世界』の付録絵葉書である。絵葉書ブームが起こると、それに合わせて雑誌の付録と それらの絵葉書には、 少数ずつながら他の付録絵葉書や日露戦争関係の絵葉書、 著名な画家が原画を描くことも多く、『女学世界』付 肉筆絵

(1)『女学世界』付録絵葉書【三二枚】

評価されている。 な画家による絵葉書を付録としていた。表1は該当期間の『女学世界』各号の目次を元にまとめた付録絵葉書の情報 『女学世界』は明治三四(一九〇一)年に博文館が創刊した女性向け雑誌で、 同誌は明治三八年一月発行の第五巻一号から明治四 二年一二月の第九巻一六号までの五年間、 商業的に成功した初めての女性誌と

巻号	発行年月	作家	タイトル	当館所蔵	図版
5巻1号	明治 38(1905) 年 1 月	久保田米斎	新年山		1-1
5 巻 2 号(増刊) 5 巻 3 号	明治 38(1905) 年 1 月 明治 38(1905) 年 2 月	水野年方	付録なし 女学生		1-2
5 巻 4 号	明治 38(1905) 年 2 月	三名克己		×	1-2
5 巻 5 号	明治 38(1905) 年 3 月	二七兄已 据田半古	春の野 春色	Ô	1-3
5 巻 6 号(増刊)	明治 38(1905) 年 4 月	- 1/6H H	付録なし		1.0
5巻7号	明治 38(1905) 年 5 月	武内桂舟	摘草	0	1-4
巻 8 号	明治 38(1905) 年 6 月	尾竹国観	五月雨	×	- 1
5巻9号	明治 38(1905) 年 7 月	武内桂舟	少女百合	0	1-5
· 巻 10 号(増刊)	明治 38(1905) 年 7 月	F 41 4 Inte/ 9	付録なし	, –	
巻 11 号	明治 38(1905) 年 8 月	水野年方	明記なし	0	1-6
巻 12 号	明治 38(1905) 年 9 月	市川(水野)秀方	明記なし	0	1-7
5 巻 13 号	明治 38(1905) 年 10 月	武内桂舟	明記なし	0	1-8
巻 14 号(増刊)	明治 38(1905) 年 10 月		付録なし		
善 15 号	明治 38(1905) 年 11 月	一条成美	文つかい	0	1-9
巻 16 号	明治 38(1905) 年 12 月	河崎蘭香	明記なし	×	
巻1号	明治 39(1906) 年 1 月	上村松園	簪くらべ	0	1-10
善 2 号 (増刊)	明治 39(1906) 年 1 月		付録なし		,
5巻3号	明治 39(1906) 年 2 月	島崎柳塢	明記なし	0	1-11
巻4号	明治 39(1906) 年 3 月	榊原(池田)蕉園	明記なし	×	
巻 5 号	明治 39(1906) 年 4 月	一条成美	明記なし	×	
巻6号(増刊)	明治 39(1906) 年 4 月	11/2m2/4/	付録なし		1 10
巻 7 号	明治 39(1906) 年 5 月	北澤楽天	黄金結婚	0	1-12
5巻8号	明治 39(1906) 年 6 月	榊原(池田)蕉園	ハンモック	0	1-13
巻9号	明治 39(1906) 年 7 月	北澤楽天	女權	0	1-14
5 巻 10 号(増刊) 5 巻 11 号	明治 39(1906) 年 7 月	古川(小阪)老士	付録なし		1-15
i 巻 11 号 i 巻 12 号	明治 39(1906) 年 8 月 明治 39(1906) 年 9 月	市川(水野)秀方	明記なし 明記なし	0	1-15
i 巻 12 号 i 巻 13 号	明治 39(1906) 年 9 月	水野年方 日高嶋助	明記なし	×	1-10
	明治 39(1906) 年 10 月	口间隔划	明記なし 付録なし	_ ^	
5 巻 14 号(増刊) 5 巻 15 号	明治 39(1906) 年 10 月 明治 39(1906) 年 11 月	榊原(池田)蕉園		0	1-17
i 巻 16 号	明治 39(1906) 年 11 月	日高嶋助	明記なし	0	1-17
'巻1号	明治 40(1907) 年 1 月	神原(池田)蕉園	はつ姿	10	1-18
巻 1 万 巻 2 号(増刊)	明治 40(1907) 年 1 月	11735(田田)無圏	はり安 付録なし		1-13
'巻3号	明治 40(1907) 年 2 月	日高嶋助	題名不詳	0	1-20
'巻4号	明治 40(1907) 年 3 月	一条成美	お節句	0	1-20
	明治 40(1907) 年 4 月	榊原(池田)蕉園	花の雲	ŏ	1-21
7巻6号(増刊)	明治 40(1907) 年 4 月	III.M. (ISHI) MEN	付録なし		
7巻7号	明治 40(1907) 年 5 月	市川(水野)秀方	明記なし		1-23
7巻8号	明治 40(1907) 年 6 月	榊原(池田)蕉園	明記なし	ŏ	1-24
7巻9号(増刊)	明治 40(1907) 年 6 月	太田三郎	明記なし	ŏ	1-25
7巻10号	明治 40(1907) 年 7 月	榊原(池田)蕉園	明記なし	ŏ	1-26
7巻11号	明治 40(1907) 年 8 月	太田三郎	明記なし	Ö	1-27
7 巻 12 号	明治 40(1907) 年 9 月	一条成美	明記なし	Ö	1-28
7 巻 13 号	明治 40(1907) 年 10 月	太田三郎	明記なし	0	1-29
7 巻 14 号(増刊)	明治 40(1907) 年 10 月	太田三郎	明記なし	0	1-30
7 巻 15 号	明治 40(1907) 年 11 月	一条成美	明記なし	0	1-31
7巻16号	明治 40(1907) 年 12 月	榊原(池田)蕉園	明記なし	×	
巻1号	明治 41(1908) 年 1 月	太田三郎	明記なし	0	1-32
巻2号(増刊)	明治 41(1908) 年 1 月	太田三郎	明記なし	×	
3 巻 3 号	明治 41(1908) 年 2 月	目次には絵葉書の記載か	『ないが、上村松園のものが	×	
		あるともいう	BB⊕3 →•)		-
3巻4号	明治 41(1908) 年 3 月	杉浦非水	明記なし	X	
3巻5号 3巻6号	明治 41(1908) 年 4 月	一条成美	明記なし	X	
3 巻 6 号 3 巻 7 号(増刊)	明治 41(1908) 年 5 月 明治 41(1908) 年 5 月		明記なし	×	
巻 / 号 (増刊) 巻 8 号	明治 41(1908) 年 5 月		明記なし 明記なし	×	1
巻 8 号	明治 41(1908) 年 7 月		明記なし	×	1
巻 10 号	明治 41(1908) 年 8 月	竹久夢二	明記なし	×	
巻 11 号	明治 41(1908) 年 9 月	宮崎(渡辺)與平	明記なし	×	
巻 12 号(増刊)	明治 41(1908) 年 9 月	竹久夢二	明記なし	×	1
巻 13 号	明治 41(1908) 年 10 月	榊原(池田)蕉園	明記なし	×	1
巻 14 号	明治 41(1908) 年 11 月	宮崎(渡辺)與平	明記なし	×	
巻 15 号 (増刊)	明治 41(1908) 年 11 月	太田三郎	明記なし	×	
巻 16 号	明治 41(1908) 年 12 月	口壳帕啡	10007 A.)	×	
巻 1 号	明治 42(1909) 年 1 月	目次には絵葉書の記載カ	*ないが、上村松園のものが	×	
		あるともいう	1		
巻2号(増刊)	明治 42(1909) 年 1 月	宮崎(渡辺)與平	明記なし	×	1
巻 3 号	明治 42(1909) 年 2 月	水野秀方	明記なし	×	
巻 4 号	明治 42(1909) 年 3 月	宮崎(渡辺)與平	明記なし	X	1
巻5号	明治 42(1909) 年 4 月	一条成美	明記なし	X	1
巻 6 号 巻 7 号	明治 42(1909) 年 5 月 明治 42(1909) 年 5 月	作者不明	(原色版)	×	1
	72111 (// // //	水野秀方	明記なし		-
巻 8 号 巻 9 号	明治 42(1909) 年 6 月	<u>竹久夢二</u> 佐老不明	明記なし	X	-
	明治 42(1909) 年 7 月	作者不明 宮崎(渡辺) 與巫	小川	×	
) 巻 10 号	明治 42(1909) 年 8 月	宮崎(渡辺)與平	明記なし	×	1
) 巻 11 号) 巻 12 号	明治 42(1909) 年 9 月	中川八郎	明記なし	×	1
(京 14 万	明治 42(1909) 年 9 月		明記なし	X	
	明治 42(1909) 年 10 月		明記なし 明記なし	X	
) 巻 13 号	田沙 49(1900) 年 11 日	一条成革			1
9 巻 13 号 9 巻 14 号	明治 42(1909) 年 11 月 明治 42(1909) 年 11 月	一 一条成美 平海百穂			
9 巻 13 号	明治 42(1909) 年 11 月 明治 42(1909) 年 11 月 明治 42(1909) 年 12 月		明記なし明記なし	X	



1-13.榊原(池田)蕉園《ハンモック》 (6巻8号/明治39年6月)



1-9.一条成美《文つかい》 (5巻15号/明治38年11月)



1-5.武内桂舟《少女 百合》 (5巻9号/明治38年7月)



1-1.久保田米斎《新年 山》 (5巻1号/明治38年1月)



1-14.北澤楽天《女權》 (6巻9号/明治39年7月)



1-10.上村松園《簪くらべ》 (6巻1号/明治39年1月)



1-6.水野年方 (5巻11号/明治38年8月)



1-2.水野年方《女学生》 (5巻3号/明治38年2月)



1-15.市川(水野)秀方 (6巻11号/明治39年8月)



1-11.島崎柳塢 (6巻3号/明治39年2月)



1-7.市川(水野)秀方 (5巻12号/明治38年9月)



1-3.梶田半古《春色》 (5巻5号/明治38年4月)



1-16.水野年方 (6巻12号/明治39年9月)



1-12.北澤楽天 (6巻7号/明治39年5月)



1-8.武内桂舟 (5巻13号/明治38年10月)



1-4.武内桂舟《摘草》 (5巻7号/明治38年5月)



1-29.大田三郎 (7巻13号/明治40年10月)



1-25.大田三郎 (7巻9号/明治40年6月)



1-21.一条成美《お節句》 (7巻4号/明治40年3月)



1-17.榊原(池田)蕉園 (6巻15号/明治39年11月)



1-30.太田三郎 (7巻14号/明治40年10月)



1-26.榊原(池田)蕉園 (7巻10号/明治40年7月)



1-22.榊原(池田)蕉園《花の雲》 (7巻5号/明治40年4月)



1-18.日高嶋助 (6巻16号/明治39年12月)



1-31.一条成美 (7巻15号/明治40年11月)



1-27.大田三郎 (7巻11号/明治40年8月)



1-23.市川(水野)秀方 (7巻7号/明治40年5月)



1-19.榊原(池田)蕉園《はつ姿》 (7巻1号/明治40年1月)



1-32.太田三郎 (8巻1号/明治41年1月)



1-28.一条成美 (7巻12号/明治40年9月)



1-24.榊原(池田)蕉園 (7巻8号/明治40年6月)



1-20.日高嶋助 (7巻3号/明治40年2月)

であるが、上村松園、

北澤楽天、

太田二

郎

竹久夢二など日本画家や洋画家、

挿絵画家として活躍していた多くの

明治四一

年一月以前は



六枚欠けているものの、

一枚も確認できない。

家の名前を見ることができる。本絵葉書資料中に含まれているものは表中に丸印で示したが、

ほぼ揃っているとみなせるだろう。

おそらくは藤井家の誰かが同誌を定期購読していたと想像され、

一方で明治四一年一月以降に関しては藤井家絵葉書資料

明治四一年一月以降



では

『女学世界』

の定期的な購読かつ付録絵葉書の収集をしていたのは誰であろうか。

棚尾の藤井家においては達吉の姉・篠

また、

先の使用済絵葉書の中に、当時東京で暮らしていた達吉の次兄・重二郎

(当時二十代後半)、

妹のくわ、

ふさ(当時ともに

女性向け雑誌という点から

は の中には

.雑誌の講読自体をしなくなった可能性が高いように思われる。

はやはり女性が想定され、





2-2

くはその妻による購読・収集であった可能性を否定できず、

当時

が受け取ったものが存在することから、 二十代前半)のいずれもが考えうる。

「碧村」と号して作家活動をしていた重二郎が、こういった美術絵葉書に興味を示す可能性もあり、重二郎もしけ取ったものが存在することから、藤井家絵葉書資料には東京の藤井家旧蔵のものも含まれているようである。

現段階ではどちらの「藤井家」が入手したものかをにわ



扶桑新聞5885号付録 2-4 (明治39年6月)

葉書として現在でも一定の人気を持っている。 は かに判断できない。 絵葉書自体は縦の折れ跡があるものが複数みられるが、 著名な画家が多く描いていることや当時の女性の風俗を描いた華やかな図柄が多いこともあって、 そういった意味で、 総じて保存状態は良好である。 未使用で状態のよいものが、 『女学世界』 前半期が中心とは 当時 の付録絵葉書 の美術絵

$\widehat{2}$ その他の付録絵葉書

え三二枚まとまって残されていることは貴重であろう。

2-3

り - 1、2)。描いたのは画中の落款「玉枝女史」からいずれも日本画家の跡見玉枝と考えられる。『女学世界』とは異な二四(一八九一)年に国光社から創刊された女性雑誌『女鑑』の付録と思われる、梅と猿まわしを描いた二枚がある(2 「絵葉書《跡見玉枝》」の記載がある。 付録絵葉書については『女学世界』以外のものも少数ながら含まれている。まずは『女学世界』に先駆けて明治 この二枚の絵葉書を見ると、 同誌がどれ程の頻度で絵葉書を付録にしていたかは詳らかでないが、 雑誌の付録絵葉書としては珍しく切り取り用のミシン目が二辺についていることか それ以外にも時折絵葉書が付属していた形跡はあるが、 明治四一 (一九〇八) その内容は定かではな 年一月発行の目次に

描いたこの絵葉書自体は比較的知られているもののようだが、作者の阿川徹照について詳細は不明である。 次に『ハガキ文学』明治四一年八月号付録の、阿川徹照《オバも猫も》(2‐3) である。夕涼みをする猫と老女を 同誌は絵

ら、二枚セットで雑誌に付属していたようにも思われ、二枚とも明治四一年一月号の付録であった可能性がある。













3-4





るように、

発行号数を記念した付録というよりは、

『扶桑新聞』の五八八五号付録28

葉書図版の投稿、

録のものは現段階では旧蔵者を確定できない。

『扶桑新聞』

付録のものは地域的に考えて棚尾の藤井家旧蔵として良いだろうが、『女鑑』『ハガキ文学』

3-2

二七日付の消印はデザインとして印刷されたものである。

われ、その意味では次項で紹介する日露戦争関係の絵葉書に近いものである。

やや離れているが、重二郎から忠三郎に送られた絵葉書の中に同誌付録のものが一枚含まれている(⑳)

(2-4)もここで紹介しておこう。これは「凱旋紀念博覧会場内噴水之図」とあ

名古屋で開かれた日露戦争の凱旋記念博覧会を記念したものと思

なお、

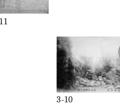
画面中の切手と明治三九年六月

懸賞を実施していたから、あるいはそういった投稿作家の一人であるかもしれない。なお発行年





ていたものである可能性が高いように思われる。



3-9 3-11













3-8













3-5

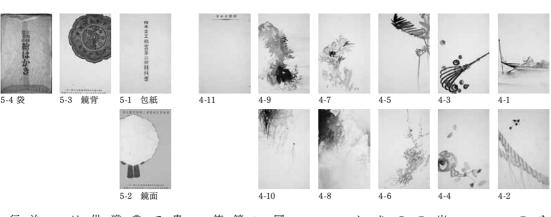


日露戦争関係記念絵葉書【一〇枚】

 $\widehat{3}$

明治三七年九月の第一回発行分はすぐに売り切れ、 てたもので使用されている (@~@)。こういった状況から考えると、未使用の記念絵葉書六枚は、重二郎の手許に残っ のものとは絵柄が重複しない。 枚(「戦地ニ於ケル観兵式」「戦地ニ於ケル陸軍ノ天長節ト大山大将」、3-2、3)、そして「赤十字事業ノ部」の三枚 軍ノ部」「天長節ノ部」「赤十字事業ノ部」の五部に分かれており、各三枚組であったが、残された未使用六枚の内訳は、 のものとしても明治三八年二月一一日の第三回発行分六枚が確認される。 書資料には、 記念絵葉書はその後も定期的に発行され、 (3-4、5、6) である。なお、 「旅順口ノ部」の一枚 絵葉書ブームのきっかけのひとつとなったのは、 「遼陽ノ部」一枚 重二郎が使用した逓信省発行の記念絵葉書が多く確認されていることは先に触れたとおりだが、 (「旅順口ニ於ケル分捕加農砲・旅順口ニ於ケル工兵ノ對壕作業」、3-1)、「天長節ノ部」の二 (20)、「海軍ノ部」 二枚 使用済絵葉書の中の第三回発行分は、重二郎から忠三郎へ宛てた また、三枚全てが未使用で残されている「赤十字事業ノ部」は、 また逓信省以外にも各地方で同種の絵葉書が発行されている。 発売窓口は絵葉書を求める人々で混乱したという。 逓信省が発行した日露戦争の ∞)、「天長節ノ部」一枚(∞)である。 第三回発行分は「旅順口ノ部」「遼陽ノ部」「海 「戦役紀念郵便絵葉書」であった。 これらは未使用六枚 達吉から重二郎 「旅順口ノ部」一枚

者ともに明治三九年七月一五日、 だが、葉書倶楽部発行のものの方が、 の同種の記念絵葉書二枚 一方地方発行のものとしては、 (3 9 10) 三河西尾の 西尾葉書倶楽部発行の エンボス加工を使用するなどデザイン的に凝ったものとなっている。また、両 が確認される。 「日露戦役凱旋祝賀記念」 いずれも当地の凱旋門や記念碑、 「凱旋祝賀記念絵葉書」二枚 の印が捺されており、 (3-7、8) と西尾弘文堂発行 神社等の写真を使用したもの その頃の発行であろう。



なお前者には袋も残されており ことが分かる。 西尾で発行されたこの四枚については地域的に考えて棚尾の藤井家が入手したものであろう。 3 11 裏面の 「貳枚壹組 金拾五錢」という記載から二枚 一組で十五銭であった

(4) 肉筆絵葉書【一○枚】

されたものか、 の羽が描かれたもの (4-2) ことから、 出 して達吉も描いたモチーフではあるが、 [の小槌や熊手などの縁起物まで様々な画面が描かれる。 ここで紹介する一○枚(4-1~10) 裏面が無地の葉書に描かれていることがわかり、 藤井家の人間が葉書に描いたものかは定かではない。貝を採る舟人(4-1)などは衣が浦の情景と などは年賀状の用途であったのかもしれない。 は、 本図は少なくとも達吉の画風とは異なったものである。 図柄が肉筆で描かれた絵葉書である。墨と淡彩で草花や山水風景から打 表面 現在の絵手紙のようなものだろうか。 4 11 上部には ただしこれらが肉筆絵葉書として購入 「郵便はかき」 と印刷されている 注連縄と羽根つき

(5) その他の絵葉書【一三枚】

使用されている (⑱)。 同競技会は明治三七年九月三日から二三日まで上野の日本美術協会列品館で開催されたことが、 鏡背を描いたもの(5-3) いる情報から分かる。 その他の絵葉書についても少しずつ見ておくことにする。まずは日本金工協会第二回競技会の記念絵葉書である。 本絵葉書資料の未使用分には、包紙一枚 従ってこれらは使用せずに残された重二郎旧蔵のものと推定される。 が一枚残されているが、 重二郎から忠三郎への使用済絵葉書の中に鏡背を描いた一枚が (5-1)と銅鏡の鏡面を描いたもの 絵葉書に印刷されて 5 2

供出されたという先代の騎馬像と思われる。 戦装束を纏馬上で笛を吹く聖徳太子像は、 貴山二王門」(5-6)、 は 《信貴山縁起絵巻》 である。現状の六枚が一セットなのか否かは即断できないが、いずれにせよ現在も観光地として、 次に大和国信貴山の絵葉書。袋(5-4)と写真絵葉書六枚が残されており、「信貴山本堂」(5-5)が二枚、 宛名面に通信文を書くことが出来なかった、 ・で知られる信貴山朝護孫寺の名所絵葉書であることは間違いない。 「信貴山寶庫」(5-7)、「信貴山多寶塔」(5-8)、 現在設置されている北村西望作聖徳太子騎馬像とは異なる姿であり、 今発行年代を厳密には定めがたいけれども、 明治三三年から四〇年の間と推察される。 「信貴山紀念聖像」(5-9) 「信貴山紀念聖像」として写る、 絵葉書の宛名面の特徴から また国宝の絵巻物 が各一枚ずつ

行されたのも同じ頃と考えられる。 治四二(一九〇九)年一月に歌舞伎座で上演された舞踊曲「正札附根元草摺」 続いて木々を描いた書割の前で二人の役者が見得を切る歌舞伎写真の絵葉書が存在する 蝶柄の着物を纏う向かって右の人物は、 八代目・市川高麗蔵扮する曽我五郎時政 のものであることが知られている。 <u>5</u> 10



て描かれた可能性も考えられる。



藤と草花 5-11





5-10「根元草摺引」 (明治42年1月)



信貴山寶庫 5-7



5-5 信貴山本堂



月に鷹 5-16 (透かし)



5-14 藤と草花 (透かし)

5-15 滝に紅葉(透かし)



5-13 月に鷹



において男性は達吉しか見当たらない。葉書の事例として妥当であろう。なお、

所持していた人物としては男性が考えられるであろうが、

この時期の藤井家

一部に量産体制の広まりによる質の低下がおきていた大正期の絵 一のところに線が引かれていることや上部の文言から大正七年以

降昭和八年以前の発行であることが想定されるが、

宛名面二分の

5-12 滝に紅葉





エロティックな要素が強い。浮世絵における「あぶな絵」

残る二枚のものは服を脱がしあう二人の女性(5-15)と、

宴の場で刃物を持った女性が襲い掛かるという、

別の絵が浮かび上がった。

いわゆる

「透かし絵葉書」

だったので

ヤマトタケルの熊襲

行水中のよう

とはいえ通常の絵柄と透かしの絵柄の間に関連性は薄く、

透かし絵葉書として のような用途を持っ





5-6 信貴山二王門

舞台の一場面ではなく、

ブロマイドとして撮影されたものと思われる。

わざわざ台の上に乗っていることや、

カメラを見つめ

印刷の粗さやずれ、

不自然な色調が目立つ、

一見して出来が良いとはいえないものである。

『女学世界』絵葉書についてもご助言を

(5-11)、滝に紅葉 (5-12)、月に鷹

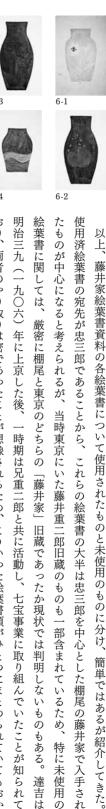
5 13)

5-8 信貴山多寶塔 ある。 退治を彷彿とする絵柄(5-14)であるが、 当初はなぜこのようなものがあえて残されているのか不思議であったが、 が描かれているものの、 向 もそれほど優れたものとは言い難い。 た絵葉書であったことが推測される。 な二人の裸の女性(5-16)であり、 ただいた辻本氏の示唆で光にかざしてみたところ、 る目線からは、 かって左は初代・市川猿之助による朝比奈三郎義秀である。 絵葉書の最後は少し珍しい三枚の絵葉書である。それぞれ藤と草花 藤と草花のものに隠された透かし絵は、

6 肉筆図案 【一〇枚】

異なり る一方、達吉による肉筆図案集 時代後期のものであれば、 案を紹介しておく。これらは葉書大の紙に描かれた焼き物の図案と思われるもので、 6 1 未使用分の最後に、厳密には絵葉書の用途ではないように思われるが、他の絵葉書と一緒に保管されていた肉筆 〜10)。鉛筆で引かれた輪郭線も確認できる。 郵便はがき」 等の文言もないためその用途は判然とせず、 当時七宝商として技量を評価され、 《路傍》 の中に類似した焼き物用の図案 用紙の大きさはほぼ葉書と同じであるが、 精力的に活動していた重 描かれた年代も不明である。 (6-11)が存在していることから、達吉によっ 壺や花瓶、 二郎による図案とも考えられ 先の肉筆絵葉書とは 茶碗など計十枚ある 他の絵葉書同様明治

結びにかえて





厳密に棚尾と東京のどちらの

「藤井家」

旧蔵であったか現状では判明しないものもある。

特に未使用の 達吉は

簡単ではあるが紹介してきた。

一時期は兄重二郎と共に活動し、











6-6 おり、 この時に當子とともに達吉らのもとへと移った可能性も考えられる。 して達吉らのもとに引き取られ、 しくはない。また、藤井家絵葉書資料を保管していた當子は、 ともあれ、 両者のやり取りは密であったことが想像されるため、

達吉の姉・篠や達吉を親代わりとして育っている。重二郎の手許にあった絵葉書が

こういった絵葉書類がひとつにまとめられていてもおか

七宝事業に取り組んでいたことが知られて

重二郎の娘として明治四二年に生まれているが、幼く

達吉をはじめとする藤井家に伝来した資料として貴重であるとともに、

絵葉



6-5

書ブームや日露戦争という時代の雰囲気をよく伝える歴史資料としても興味深いものであろう。

この藤井家絵葉書資料は、

6-8

6-7

(註)

- 本書年報編五七頁及び五九~六七頁収録の飯塚赫子コレクション及び都築咲子コレクション。なお本稿で取り上げる絵葉書資料は都 築咲子コレクションに付属したもの
- 2 拙稿「アメリカからの手紙―藤井達吉の滞米時期に関する報告―」『碧南市藤井達吉現代美術館 研究紀要1031(碧南市藤井達吉現
- 3 タル私製葉書ハ通常葉書ト看做ス」(『法令全書 明治三三年』内閣官報局 六三六頁。ただし国立国会図書館近代デジタルライブラ リーを参照した) 「政府ノ発行スル通常葉書ト同一ノ寸法及紙質ニシテ之ト同一ノ位置ニ「郵便葉書」ノ文字ヲ印刷シ且之ト同額ノ郵便切手ヲ貼附シ

6-9

6-10

- 4 これ以前にも官製葉書に印刷を施したものが年賀状を中心に使用された例はあるが、広く普及するにはいたらなかったという(生田 誠「日本絵葉書の歴史と特徴」『麗しき日本絵葉書 一〇〇の世界』日本郵趣出版 二〇〇九年 二二二頁)。
- 本文の文字解読は碧南市文化財課の豆田誠路の協力を得て筆者が行った。なお改行は「∕」で、現段階で判読できない文字は「■ で示し、振り仮名等は適宜補った。
- 「三」のサインから和田三造と推定されている。以下同じ。
- 7 6 書と内容が一致している。このほか②以降の葉書とも内容が一致する記載が多くみられる。 使として敵の前哨に差遣し陛下の聖旨勧降書を敵の要塞参謀長に手渡しせしめたり。十七日朝十時敵より回答ある筈なり。 「梅若実日記 八日に「…旅順口勧降書に対し降伏絶対拒絶し緋戦闘員避難救護の聖旨に対しても直に応ずるを難じたりと。」と記され、 第七卷』(八木書店 二〇〇三年)参照。本書一四六頁の明治三七年八月一七日に「十六日朝八時軍参謀山岡少佐を軍 ①の葉 同じく

6-11

藤井達吉 《路傍》(当館蔵)より

5

- 『ボストン美術館所蔵 ローダー・コレクション 美しき日本の絵はがき展』図録(日本経済新聞社 二〇〇四年)四〇頁掲載
- 生田誠『日本の美術絵はがき1900- 1935 明治生まれのレトロモダン』(淡交社 二〇〇六年)四二頁掲載
- 現状で文献等には見当たらないようだが、⑨の葉書の図柄、 、サインとの類似から関連するものと思われる。





挿図2



19

美林大学 二〇一一年)二二頁。

18 17

註12参照。

16

山田俊幸『アンティーク絵はがきの誘惑』(産經新聞出版

ノ部」の五部が各三枚組で発行された。

註12参照。第三回発行分は明治三八(一九〇五)年二月一一日に「旅順口ノ部」「遼陽ノ部」「海軍ノ部」「天長節ノ部」「赤十字事業

二〇〇七年)一八頁掲載。なお『ハガキ文学』は明治三七(一九〇四)年一〇月、

日本葉書会により創刊された雑誌。

15 14 13

註8前掲書五四頁掲載。

12 11

註9前掲書三七頁掲載。

逓信省発行の日露戦争記念絵葉書については、島田建造著/友岡正孝編『カラー復刻版

二〇〇九年) に発行日等の情報とともに全て掲載されている。第一回発行分は明治三七 (一九〇四) 年九月五日に六枚組で発行された。

日本記念絵葉書総図鑑』(日本郵趣出版

第二回発行分は明治三七(一九〇四)年一二月二五日に三枚組で発行された。

挿図1

23 22 21 20

藤井達吉の全貌

辻本氏によると、当時は雑誌を二つ折りで輸送することが多かったようで、

未使用の絵葉書に残るこの折れ跡は使用痕ではなく、

二〇一三年)五二 - 三頁。

野に咲く工芸(宙を見る絵画)展図録(キュレイターズ

達吉自身については、彼が渡米中であった明治三八(一九〇五)年六月から一二月の間の付録も残されているため可能性は低い

彼らの多くは絵葉書だけでなく、同誌の口絵なども手がけている。

会副会長・辻本 攻 氏のご助言を受けた。

表の作成にあたっては近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧 第六巻』(一九八五年

大空社)をもとにし、日本絵葉書

心理·教育学研究』二(桜

石渡尊子「雑誌『女学世界』に見る女性たちのキャリアデザイン―明治後期を中心として―」『桜美林論考

観艦式紀念絵葉書は明治三八(一九〇五)年一〇月二二日に二枚組で発行された。

27 26 25 24

送方法の影響ではないかとのことである。

近代女性文化史研究会編『近代婦人雑誌目次総覧 安政五 (一八五八) 年—昭和一八 (一九四三) 年。 註16参照。

『フィリップ・バロス コレクション

絵はがき芸術の愉しみ展―忘れられていた小さな絵―』図録(朝日新聞社

一九九二年

(彩流社

第二巻』(一九八五年 大空社)参照。 跡見学園の創設者である跡見花蹊の従妹。

28 生田誠『2005日本絵葉書カタログ』(里文出版 二○○四年)九七頁掲載。なお、『扶桑新聞』は明治二○(一八八七)年五月に 愛知で創刊された新聞で、後の中日新聞の前身のひとつ。

30 29 境界線の位置が年代判定のおおよその指標となる。また昭和八年以降には上部の「郵便はかき」の文字が「郵便はがき」と濁音表記 なり(挿図2)、さらに大正七年には宛名面の通信欄が二分の一まで拡大される(挿図3)。従って、宛名面に引かれた通信欄を示す 近代の絵葉書においてはその宛名面の特徴が発行年代推定の手掛かりとなる。明治三三(一九〇〇)年の私製葉書の認可からしばら に変更される(ただしそれ以前のもので濁音表記のものも存在する)。学習院大学史料館編『絵葉書で読み解く大正時代』 くの間、私信を書くことが禁じられていた宛名面(挿図1)だが、明治四○年には三分の一までは私信を書くことが許されるように 註12及び註15参照

31 年三月一日現在)。 文化デジタルライブラリー(http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/)の「収蔵資料を見る」「プロマイド」の項目から参照できる(二〇一七 二〇一二年)一八頁参照。

昭和一三年(一九三八)に図案五○枚を一セットとし、限定五○部が刊行された肉筆図案集 父・忠三郎は大正二(一九一三)年に死去しており、長兄、次兄の消息は不明(それぞれの娘は達吉らに引き取られている)。

なお、この頃一家は既に棚尾を離れ、 先に上京していた達吉のもとに身を寄せている。

本稿を成すにあたっては、『女学世界』付録のものを始めとした近代の絵葉書について、日本絵葉書会副会長・辻本 攻 氏から貴重な

資料のご寄贈のみならず、

様々な情報をご